

「研究」は楽しい。最も興味のある人物イエスも、高校時代から好きだったサッカーも、毎日自宅で流している Atoms for Peace のポリリズムミク的な音楽も、そして日々の家事でさえも、関心のあることは全て「研究」の対象になってしまうので、結果、私には趣味と言えるものがなくなってしまった。「研究」が職業になったこと自体、実に幸運だったと思わざるをえないし、日々何だか楽しくなかったり、自分自身に悩んでくよくよしてしまう人にはぜひとも「研究」を勧めたい。日々の営みは様々な問題に満ち溢れており、それゆえに「研究」になりうる。繰り返すけれど、「研究」は楽しい。決して格好を付けているわけではなく、また私が何か特別なことをしているわけではないと思う。あらゆる事柄を問題への取り組みや試行錯誤と捉えるならば、日常生活はいつのまにか「研究」になってしまう、それだけのことである。何でも探究として取り組むならば、仕事と趣味とか、公私とか、そうした線引きは意味を失うだろう。

たとえば料理が趣味という人は、毎日食事を作る必要がない人なのだろう。私自身料理は好きな方だと自認しているが、毎日家族のための食事を調えるために台所に立つため、趣味という感じは全くしないし、正直疲れている時などそのタスクが苦しみであることもある。それでも毎日何がしか工夫を施しながら、何らかの料理らしきものをこしらえる。それを食べながら、家族とあれこれ話す。皆でもりもり食べて盛り上がる食卓もあれば、3歳の娘に残酷にも「美味しくない」と言われ泣きたくなることもある。その悲しみに動機づけられ、新たな調理法をインターネットや書籍で調べてみたり、自分自身で新たな方法を編み出したりもする。多くの方が従事しているであろう、こうした試行錯誤としての生を私は「研究」と呼びたい。日々の試行錯誤と学問的研究は大きく異なるものではないし、異なるべきではない、とさえ思っている。

そういうわけで、私は「研究」というものを広い意味において、ある意味では生き方として捉えている。つまり、対象を客体化して分析し、実証的データを積み重ねた上で、その結果を一つの完結した学術論文としてまとめるということは確かに研究なのだが、先に示したような試行錯誤としての生という大きな氷山の一角に過ぎないのではないか。こうした「研究」という態度・構えが持つ潜在的な可能性を教えてくれる事象の一つに「当事者研究」というものがある。この「当事者研究」は、近年、私たちの常識を覆す様々な活動で注目を集めている北海道・浦河の「べてるの家」で 2001 年に始められた。「べてるの家」で生活する精神障害を持つ方々が、自らの抱える問題や困難を「研究」し、その内容を共有するミーティングを始めたのが「当事者研究」の始まりである。ちなみにこの「べてる」という名前は、旧約聖書の有名なエピソードであるヤコブの夢から取られているのだが、彼らの活動とキリスト教との興味深い関係については、また別の機会に書いてみたい。

当事者とそれに継続的に寄り添う他者とともに行われる「当事者研究」は、障害者支援の分野に大きなインパクトを与え、現在では、精神障害以外の障害者にも普及し、その成果は、哲学・心理学・医学といった学問領域に有益な知見を提供するまでに至っている。この「当事者研究」の特徴を、石原孝二氏の分析<sup>1</sup>に依拠しながら、三つほど挙げてみたい。それらは、アカデミズムに属する人間がしばしば無自覚になっている「研究」という営為の潜在的可能性を、実に生な状態で表現しており興味深い。

「当事者研究」の一点目の特徴は、借り物ではない、自分自身の言葉を用いた問題の引き受けにある。そもそも「当事者研究」というものは、第三者である医療者によって自らの苦しみを病名として名付けられることにより、自分で苦しむ権利を剥奪された人々が、苦しみを自分のものとして取り戻すために始められたとされている。「当事者研究」においては、自分の病名を自分で付ける。また自らの妄想や幻想を、異常な精神状態として片付けず「幻聴さん」と呼びつつ、日常からの逸脱ではなく一つの現実として語りだす。「べてるの家」のソーシャル・ワーカー（「べてる」ブームの仕掛け人でもある）である向谷地生良氏は、こうした作業を、深刻な問題を「持ちやすい形」に変えることと表現する。「べてるの家」の方々の語りの驚くべき創造性は、どこかで聞いたことがあるような他人の言葉でもなく、よく考えると何を意味するのかよく分からない学術的概念でもなく、まさに自分で編み出した言葉のみが、問題を、少なくとも問題の質感を確実に捕らえうることを教えてくれる。

「当事者研究」の二つ目の特徴として、問題解決を目指さない、という点が挙げられる。向谷地氏によれば、「当事者研究」とは「問題解決技法」ではなく苦勞の「棚上げ」なのだと言う。「べてるの家」で「当事者研究」をする人たちは、心ならずも親を殴ってしまったり、新築の自宅に放火したりしてしまうような精神障害者である。このおよそ笑えないような深刻な問題を抱えている人たちに対して医療的な意味での治癒も思うように進まないという、極めて追いつめられた状況で生み出されたのが「当事者研究」だったようだ。向谷地氏いわく「当事者研究」とは「生活の中で起きてくる現実の課題に向き合う『態度』」<sup>2</sup>であり、「かかえている問題に対して『研究すればいい』と立ち位置を変えると、問題そのものは何も解決していないのに、解消される」という効果が生じるのだという。なぜ問題が解消するのだろうか。それは、そもそも「研究」が、最終的解決などなくとも際限なく続けられる営為として認められているからだろう。それゆえに「あなたにはこういう問題がある」と言われても、「それについては研究しています」と答えれば良いのである。

問題が、解決はせずとも、解消する理由にはおそらくもう一つある。それは、自分の「研究」を聴き、自分より自分のことを分かるかもしれない他者がいてくれるからである。この共同性こそが、べてるの「当事者研究」の第三の特徴なのだが、その独自性は何より「自分のことを自分が一番分からない」ことを認め、それゆえに他者を必要とする点にある。「当

<sup>1</sup> 石原孝二「当事者研究とは何か」『当事者研究の研究』石原孝二編、医学書院、2013年。

<sup>2</sup> 向谷地生良・浦賀べてるの家『安心して絶望できる人生 NHK 出版、2006年、53頁。

「当事者研究」が単なる自己満足や自慰に陥らないで済む理由は、この徹底した自己不信にあると言っても良いだろう。考えてみれば学術的研究もまた、似たような理由で他者を必要としているのではないだろうか。実際問題、私たちは、自分一人で考えていてもますますわからなくなるばかりなのである。もちろん他者と考えることで全てが解決するわけではないけれど、問題が明確化したり、とりあえずその問題について考えていても良いのだという承認が得られたりする。これは大変にありがたいことだ。

たとえば、仕事を終え、疲労困憊で家に着いたけれど、ご飯はできていない、子どもは不機嫌で「だっこだっこ」と言って真っ赤な顔をして泣いているという惨状がある。あまつさえ、朝食の食器さえ洗えていない、というマイナスからのスタートだってある。多くのお母さんがまさに泣きたくなる瞬間である。子供が2歳になる前など、下手したら毎日こういう状況だ。そのような時に、私はダメな人間だ、とすっかり落ち込んでしまわないためにも、この苦境を乗り切るために様々な手段を試みる、というように「研究」へとモードチェンジできれば、気持ちはずっと楽になる。「こうしてみたけれど、どうなるか見てみよう」という姿勢を、「研究」は自ずと取らせてくれる。「当事者研究」が思うように治療が進まない統合失調症患者のための苦肉の策として生み出されたように、「研究」は苦境においてこそ力を発揮してくれるはずだ。

もともと「べてるの家」の「当事者研究」の発想の源は、「べてるの家」を支援する企業で行われていた「一人一研究」だったそうだ。社長から掃除のおばちゃんまで皆何かを一つ研究して発表し合うということを企業全体で行っていたそうである。生きることには、数限りない「研究」の素材が溢れており、私たちは、値段に比してお得なランチや最短で地下鉄を乗り換えるためのルートなどに関して毎日「研究」を行っているとも言えるだろう。日々様々なことを面白がって生きさせてくれる「研究」を、私は全ての生活する方々に勧めたい。